

いっすんぼうし たびだ 一寸法師 1：旅立ち

「一寸法師」は、御伽草子と呼ばれるジャンルの作品です。御伽草子は物語の一種です。比較的短くて単純な筋書きを持つものが多く、南北朝時代・室町時代にさかんに作られました。この時代になると物語の読者層は庶民にまで広がり、御伽草子は女性や子どもを中心に多くの人々に親しまれました。

御伽草子は300編ほどが現存しており、その内容から6種に分けられています。くげもの、ぶげもの、しゅうきょうもの、しょみんもの、いるいもの、いこくもの、しゆるい、公家物、武家物、宗教物、庶民物、異類物、異国物の6種類です。

テキストとして取り上げた「一寸法師」はそのうち庶民物に属します。庶民物には、身分の低い者が才覚によって出世し、高貴な女性と結ばれるといったサクセス・ストーリーが少なくありません。「一寸法師」はそうした立身出世談の典型と言えます。庶民物の御伽草子としては、「一寸法師」のほか、「文正草子」や「物くさ太郎」がよく知られています。

「一寸法師」というタイトルは主人公の呼び名で、この主人公の背丈が一寸（約3cm）しかなかったことから来ています。

子どものいない老夫婦が住吉の神に祈願して美しい男児を授かり、一寸法師と名付けました。しかし、一寸法師は十二、三歳になってもいっこうに背が伸びなかったため、夫婦は彼を化物のようだと思い、どこへでもやってしまいたいと言います。

そんな親たちの思いを知って、一寸法師は家を出ることを決意します。そしてお椀の舟に乗り、都へと旅立ちます。

ほんぶん しゅってん
本文の出典：

おおしまたてひこ わたりこういち こうちゆう やく むろまちものがたりそうししゅう しんべんにほんこてんぶんがくぜんしゅう
大島建彦・渡浩一 校注／訳『室町物語草子集』（新編日本古典文学全集63）

しょうがくかん ねん
小学館、2002年